

形容詞の語尾の脱落過程

著者	藤原 保明
雑誌名	文藝言語研究. 言語篇
巻	52
ページ	75-91
発行年	2007-10-31
その他のタイトル	Final -e and Its Loss in Middle English Adjectives
URL	http://hdl.handle.net/2241/91614

形容詞の語尾の脱落過程

藤原保明

はじめに

現代英語の文の場合、数 (number) の区別に関する情報は、(1a, b) の例から明らかなおろ、日本語の文の場合よりも余剰性 (redundancy) が高い。すなわち、日本語の数の区別は指示代名詞だけに依存しているが、英語では動詞、冠詞、名詞からも明らかになる。しかしながら、(1c, d) の例から明らかなおろ、日本語でも英語でも、形容詞が数の情報を担うことはない。

- (1) a. This is an apple. 「これはリンゴです。」
 b. These are apples. 「これらはリンゴです。」
 c. This is a red apple. 「これは赤いリンゴです。」
 d. These are red apples. 「これらは赤いリンゴです。」

ところが、古英語の場合、名詞や指示詞と同様、形容詞も性・数・格を表す語尾を伴っていた。たとえば、形容詞が他の決定詞 (determiner) を伴う (2a) のような場合は、形容詞は下線を施した弱変化語尾を伴い、他の修飾語によって限定されない (2b, c, d) のような場合は、強変化語尾を伴っていた。ちなみに、(2c) のような無語尾にも性・数・格を表示する機能があった。

- (2) a. Pæs is ān ræda æppel. 'This is a red apple.'
 b. Pæs sindon ræde æpplas. 'These are red apples.'
 c. Pæs æppel is ræd. 'This apple is red.'
 d. Pæs æpplas sindon ræde. 'These apples are red.'

それゆえ、英語を通時的に見た場合、指示代名詞、be-動詞、名詞には数の区別が維持されているのに対して、この区別が形容詞から消失したのはなぜかという疑問が生じてくる。Traugot (1972:111) は、形容詞の語尾はすでに後期古英語において名詞+be+形容詞という構造においては崩れるか完全に脱落したが、名詞の前ではそうはならなかったと述べている。形容詞の語尾は、数の情報が余剰的であったり、他の文法上の要素によってまかなわれる場合に

は、機能しなくてもすむことから、弱化(reduction)と脱落(loss)という過程を受けても当然と思われる。形容詞の語尾は一般に15世紀末までに脱落するが、その具体的な過程は明確に記述する必要がある。本稿の目的はここにある。

1. 中英語における形容詞の語尾の脱落過程

中英語は一般に1100～1500年の400年間とされている。最初の200年を前期、残りの200年を後期とすると、屈折語尾の脱落過程を探るという目的には後期の文献がふさわしい。今回は1400年頃の『マンデヴィル旅行記』(*Mandevill's Travels*, 以下、MTと略す)を取り上げ、比較的使用頻度の高い形容詞の中から無作為に選んだ fair 'fair', god 'good', gret 'great'と不定代名詞の many を分析対象とした。なお、テキストは Seymour (1967)とした。代名詞の many を取り上げた理由は、この語は代名詞という範疇に含まれるが、形容詞用法もあることから、範疇と用法の区別と語尾の脱落との関係を明らかにできるからである。なお、MTでは古英語の形容詞の屈折語尾(-a, -an, -e, -esなど)は、すでに弱化と脱落を経て -e だけが残されている。この語尾は、たとえば14世紀後半のチョーサーの作品では複数形や決定詞を伴う場合に維持されている (Bradley 1904:41, Kerkhof 1966:126-7)。ちなみに、MTの言語研究としては Van der Meer (1929)などが知られているが、本研究で明らかにしたい情報はほとんど得られない。

1.1. Fairの語尾 -e

1.1.1. 限定用法の単数形の fair と語尾 -e

形容詞を限定用法 (attributive) と叙述用法 (predicative) に区別し、形容詞によって修飾される名詞を主要語 (head) と呼ぶことにする。最初に、主要語が単数の場合、修飾語の fair が語尾 -e を伴うか否かを探ることにする。中英語と現代英語の fair は古英語の *fæger* に由来することから、主要語が単数であれば、fair は当然のことながら複数語尾 -e を伴わないはずである。しかし、MTの場合、(3a, b, c) のような無語尾の fair (56例=62.99%) に対して、(3d) のように語尾 -e を伴い faire となる例は多く、33例、すなわち、全体の37.01%に達する。単数形の形容詞に非語源的 (inorganic) な語尾 -e がこのように多く付加されるのはなぜであろうか。可能性としては、語尾 -e がすでに「複数」を明示する機能を失っていたため、単数形に付加されても混乱

が生じなかったと考えることもできる。一方, Mustanoja (1960:276) は, 子音で終る1音節語の形容詞の一部には語尾 *-e* が維持される可能性があることを指摘している。しかし, この時点で結論を出すのは早計であると思われる。非語源的な語尾 *-e* と並んで興味深いのは, (3c) のような無語尾の *fair* が15例 (26.79%) も主要語の後位置に生じるのに対して, 語尾 *-e* を伴う *faire* が主要語の後位置に全く生じないことである。これについては, ここで若干検討しておきたい。限定用法の形容詞にとって, 主要語に先行する位置は古英語から今日に至るまで無標 (unmarked) であり, これとは逆に, 主要語の後位置は有標 (marked) であると考えられる。一方, 形容詞 *fair* の単数形の場合, 複数形の語尾 *-e* が付加されない形式, すなわち *fair* は無標であり, *-e* が付加された形式, すなわち *faire* は有標であるとみなせる。したがって, *faire* のような「有標の形式は主要語の後という有標の位置を占めることはできない」という仮説を設定し, この仮説を *fair* に適用することとする。

- (3) a. *Constantynoble is a fulle fair cytee*
 ‘Constantinople is a very fair city’ (III. 10/16)
- b. *At Babyloyne there is a faire chirche of oure lady*
 ‘At Babylonia there is a fair church of our lady’ (VI. 24/1)
- c. *but it is a gode sight to beholde and a fair*
 ‘but it is a good and fair sight to behold’ (XXIII. 57/14)
- d. *a gret lake in a fulle faire pleyne*
 ‘a great lake in a very fair plain’ (XXI. 145/2)

1.1.2. 叙述用法の単数形の *fair* と語尾 *-e*

Fair が単数の述語動詞の補語である場合, この *fair* は当然単数形となり, 語尾 *-e* は付加されないと思われる。MT では(4)のような例は6回生じるが, すべて無語尾である。この事実は予測どおりであるが, 絶対数が少ないことから, この事実だけで結論を導き出すのは賢明ではない。

- (4) a. *the castelle of Arkes that is bothe fair and strong,*
 ‘the castle of Arks that is both fair and strong’ (XIV. 90/11)
- b. *And it is right fair and fulle of folk,*
 ‘And it is very fair and full of people’ (V. 22/33)
- c. *that is right fair and wel pollissht.*
 ‘that is very fair and polished well.’ (XI. 64/30)

1.1.3. 限定用法の複数形の fair と語尾 -e

限定用法の fair が複数形とみなせる (5a) のような例は36回生じるが、すべて語尾 -e を伴っている。それゆえ、複数形の主要語を修飾する faire の語尾 -e は「複数」を表す機能を完全に維持しているといえる。注目すべきことに、単数形で語尾 -e を伴う33例の有標の faire は主要語の後位置に生じることは全くなかったのに対して、複数形の無標の faire のうち6例は (5b, c, d) のように、主要語の後位置に生じている。すなわち、これらの faire は単数形に語尾 -e が付加された有標の faire とは異なり、fair の無標の複数形であることから、有標の位置を占めることができるといえる。それゆえ、1.1.1の仮説はこれによって正しさが立証されたことになる。

- (5) a. And there ben *faire* vynes aboute the cytee
 ‘And there are fair vines about the city’ (IX. 52/4)
- b. Babyloyn... ben grete huge cytees manye and *faire*,
 ‘Babylon... are great, huge, many and fair cities’ (VI. 30/32)
- c. And there aboute beth grete hullis and *faire*
 ‘And thereabout are great and fair hills’ (XIV. 92/20)
- d. And thei ben fulle grete schippes and *faire*
 ‘And they are very great and fair ships’ (XXII. 153/22)

1.1.4. 叙述用法の複数形の fair と語尾 -e

複数形の述語動詞の補語となる fair は (6a, b) の2例のみであるが、いずれも複数語尾 -e を伴う。

- (6) a. of tho bestes that ben *faire*,
 ‘of those beastes that are fair’ (XXII. 151/18)
- b. And thei ben rightly *faire*
 ‘And they are rightly fair’ (XXII. 152/10)

1.1.5. まとめ

形容詞 fair の語尾 -e の有無、および用法と数の区別に関する分析結果を総合すると、限定用法と叙述用法のいずれにおいても、主要語が複数形の場合には fair は例外なく語尾 -e を伴う。一方、主要語が単数形の場合、fair は原則として無語尾であるが、語尾 -e を伴うこともある。ただし、語尾 -e を伴う単

数形の形式 *faire* は有標的であり、主要語の後位置では用いられない。一方、単数の無標の形式 *fair* は主要語の後位置に生じることができる。

1.2. God 'good' の語尾 -e

1.2.1. 限定用法の単数形の god と語尾 -e

単数の主要語を修飾する *god* は126回用いられている。驚くべきことに、このうちの大半の122例 (96.83%) では、単数形にもかかわらず、(7a, b) のように語尾 -e を伴い *gode* となっている。これはきわめて特異な現象であり、何か特別な背景がありそうである。この点に関する考察は他の例のデータと付き合わせた上で行いたい。もう一つ別の顕著な特徴は、122例のうちの12例において、*faire* の場合とは異なり、(7c) のように有標の形式が主要語の後位置に生じることである。このような現象は *fair* の場合に設定した仮説と矛盾することから、以下において考察したい。

- (7) a. that was wont to ben a *gode cytee* and a plentyfous,
 ‘that was wont to be a good and plenteous city’ (XVI. 108/28)
 b. that was a *gode Cristene man* and baptized,
 ‘who was a good and baptized Christian’ (XXIV. 165/21)
 c. Syrie is a gret *contree* and a *gode*,
 ‘Syria is a great and good country’ (XVIII. 189/26)

この問題を解決するための手がかりは、(8a, b, c, d) の無語尾の4例から得られそうである。すなわち、この4例は、興味深いことに、いずれも *god* という形式ではなく、母音字が重複した *good* となっている。したがって、この形式が語尾 -e を必要としない理由を探せばよいことになる。もっとも、*good* に語尾 -e がつく場合が1例 (=8e) あることから、*good* という形式が語尾 -e の付加を随意的にする理由を探れば十分である。あるいは、古英語の *gōd* ‘good’ に対応する語に *god* という形式を認めない理由を探ればよい。

- (8) a. and for non other thing *is* it not *good*.
 ‘and it is not good for any other thing’ (XIV. 94/20)
 b. And it was wont to ben... a gret *hauene* and a *good*,
 ‘And it was wont to be... a great and good haven’ (XVIII. 120/35)
 c. that is a gret *yle* and *good* and *fair*,
 ‘that is a great and good and fair isle’ (XXI. 143/30)
 d. that is withouten *qualitee good*,

'that is without good quality' (XXXIV. 230/7)

e. and thei ben of right *goode* tast and delicious

'and they are of just good and delicious taste' (XXX. 197/18)

この問いに関してすぐ思い浮かぶのは「神」を表す *god* である。すなわち、MT では神は一般に (9a) の最初の例のように大文字で *God* と記されているが、(9a) の二番目の例や (9b) のように小文字で *god* と表記されることもある。それゆえ、神を表す *God* または *god* と表記上の混同を避けるために、著者は形容詞 *god* の単数形に語尾 *-e* を付加するか、または、母音字を重ねて *good* と表記したと考えられる。

(9) a. And men may wel lykne that bryd vnto *God* because that there nys no *god* but on,

'And men may well liken that bird to *God* because there is no *god* but one' (VII. 34/22-23)

b. There is no *god* but on and Machomete his messenger.

'There is no *god* but one and Mahomet his messenger.' (XV. 103/34)

1. 2. 2. 叙述用法の単数形の *god* と語尾 *-e*

次に、叙述用法の単数形は13例あるが、このうちの9例は (10a, b) のように語尾 *-e* を伴う。一方、残りの4例は無語尾であるが、いずれも (10c, d) のように *o* が重複した *good* という語形になっている。したがって、叙述用法の単数形の *gode* または *good* も、限定用法の単数形の用法と一致することから、著者は「神」を表す '*God, god*' との混同を避けるために、形容詞の単数形は *gode* または *good(e)* としたと断言できる。そうなると、単数形の優勢な形式 *gode* は MT の著者にとっては無標の形式であったことになり、主要語の後位置に生じる (7c) のような12例も1. 1. 1の仮説に合致する。

(10) a. yif it be fyn and *gode*,

'if it be fine and *good*' (VII. 37/4)

b. that it was perfite and *gode*

'that it was perfect and *good*' (XVI. 107/3)

c. the whiche is *good* for manye dyuerse medicynes

'which is good for many diverse medicines' (VIII. 41/24)

d. and the blessedde virgine Marie is *good* and holy mayden

‘and the blessed virgin Mary is a good and holy maiden’

(XV. 98/28)

1. 2. 3. 限定用法の複数形の god と語尾 -e

形容詞の god が複数形の主要語を修飾する例は49あるが、すべて (11a, b) のように語尾 -e を伴う。このうちの3例では、無標の gode は (11c) のように主要語の後位置に来ていて、1. 1. 1の仮説どおりの現象といえる。このように、前置・後置を問わず、god の複数形はすべて語尾 -e を伴うが、MT では語形は必ずしも規則的であるとは限らず、他の形容詞の複数形の語尾 -e の頻度と比べても特異であることから、著者の特別な意図が反映されている可能性が高い。なお、複数形の主要語に対応する god の語形は gode のみであり、単数形の場合に用いられた goode という語形はまったく生じない。仮に、1. 2. 1 と 1. 2. 2 で指摘した good が god の単なる異形であったとしたら、(11) のような複数形の場合には goode も生じるはずである。それゆえ、これらの事実から判断すると、著者にとって god の複数形は gode と表記すれば十分であり、good という語形は「神」を表す god との混同を避けるために単数形に限りて用いられたといえる。

- (11) a. therefore in that contree ben the gode astronomyeres,
 ‘therefore in that country are the good astronomers’ (VII. 32/10)
- b. In this Armenye ben fulle manye gode cytees,
 ‘In this Armenia there are very many good cities’
 (XXVIII. 187/11)
- c. and vpon euery brigge ben stronge toures and gode,
 ‘and on every bridge are strong and good towers’ (XXII. 150/25)

1. 2. 4. 叙述用法の複数形の god と語尾 -e

形容詞の god が複数形の述語動詞の補語となる例は5回生じるが、いずれも (12) のように語尾 -e が付加されていて、無語尾や goode となる例は一切生じない。これは複数形の限定用法の場合と全く同一である。

- (12) a. the werkes of Ihesu Crist ben gode
 ‘the works of Jesus Christ are good’ (XV. 98/26)
- b. For the Sarazines ben gode and feythfulle,
 ‘For the Saracens are good and faithful’ (XV. 102/5)

- c. and thei ben gode and of gret vertue.
 ‘and they are good and of great virtue’ (XVII. 117/13)

1.2.5. まとめ

MTの著者は、「神」を表す名詞には God か god を用い、形容詞の god には、単数形では語尾 -e を付加するか、それとも母音字を重複させて good とし、複数形では語尾 -e を付加して gode とし、名詞の God/god と形容詞の god との区別を徹底しようとした。なお、goode という語形は 1 例のみであるが、この語形は gode や good と同じく、「神」を表す God/god と区別するという著者の意図を反映したものであり、単なる例外的な形式ではない。

1.3. Gret 'great' の語尾 -e

MT における gret の場合、固有名詞の一部を形成している大文字の 51 例の Gret, すなわち, Grete Armenye ~ Armenye the Grete ‘Great Armenia’, Grete See ‘Great Sea’, Gret Cane ~ Grete Chan ‘Great Khan’, Grete Seel ‘Great Seal’ などについては、特定の単数形の固有名詞を限定する場合に限られ、一般性に欠けることから、今回の分析対象からは外すことにする。

1.3.1. 限定用法の単数形の gret と語尾 -e

小文字の gret が単数形の主要語を修飾する例はきわめて多く、356 回生じる。このうち、(13a, b, c) のような無語尾の場合は 327 例、全体の 91.85% を占める。一方、語尾 -e を伴う (13d, e) のような場合は 29 例あり、8.15% を占める。主要語の後位置に生じる (13c) のような例は 18 回生じるが、興味深いことに、すべて無語尾の gret に限られることから、これらの例についても「無標の形式は有標の位置を占めることができる」という 1.1.1 の仮説は有効である。

- (13) a. And there is a gret hille that men clepen Olympus
 ‘And there is a great hill that men call Olympus’ (III. 12/9)
- b. The kyng of this yle is a ful gret lord and a mighty,
 ‘The king of this isle is a very great and mighty lord’
 (XXII. 147/15)
- c. in that chapelle is the ston gret and large
 ‘in that chapel is the great and large stone’ (XI. 66/28)
- d. whan the grete tour of Babel was begonnen to ben made,

‘when the great tower of Babel was begun to be made’

(VI. 28/12)

e. And hit is a *grete ryuere* berynge schippes,

‘And it is a great river bearing ships’

(XIV. 92/26)

1.3.2. 限定用法の複数形の gret と語尾 -e

Gret が複数形の主要語を修飾する例は144回生じるが、このうち、(14a) のように語尾 -e を伴うのは136例 (94.44%) に達する。一方、語尾 -e が付加されない (14b) のような場合は8例 (5.63%) にすぎない。主要語の後位置に生じる (14c) のような *grete* は24例であるが、(14d) の1例を除いて、すべて複数語尾を伴っている。この1例の場合、*gret* は主要語の直後ではなく、かなり後位置にあり、しかも、and で結ばれた一般的な等位表現の二番目の形容詞ではなく、補足的表現であり、さらには、(14d) に引用した Pollard (1900: 192) の現代英語訳からも明らかなおり、主要語からはかなり離れていて、「複数性」の牽引 (attraction) が弱くなっている可能性がある。

(14) a. men fynden many precious stones and *grete perles*.

‘men find many precious stones and great pearls’ (XXI. 145/8)

b. withinne many mansiouns and many *gret duellynge places*

‘within many mansions and many great dwelling places’

(VI. 28/21)

c. And alle aboute that hille ben *dyches grete* and depe.

‘And all about that hill are great and deep ditches’

(XXIII. 155/5)

d. And there ben *gees* alle rede thre sithes more *gret* than oure here,

‘And there are geese, all red, three times more great than ours here’

(XXXI. 210/10)

1.3.3. 叙述用法の単数形の gret と語尾 -e

次に、*gret* が単数形の動詞の補語となる例は25回生じる。いずれも、(15) のように語尾 -e を伴うことはなく、単数形は無語尾という原則がきわめて忠実に守られている。

(15) a. thi power *is gret* vpon thi subgettes.

- ‘thy power is great upon thy subjects’ (III. 13/21)
- b. for the hete is there so *gret*
 ‘for the heat there is so great’ (XVIII. 123/10)
- c. of the whiche the leste is als *gret* as ii. men.
 ‘of which the smallest is as great as two men’ (XIX. 128/2)

1. 3. 4. 叙述用法の複数形の *gret* と語尾 *-e*

一方, *gret* が複数形の動詞の補語として用いられる例は9回生じるが, (16)のように, すべて複数形の語尾 *-e* を伴い, 無語尾の例は生じない。この場合も語尾 *-e* の付加に関する原則は忠実に守られている。

- (16) a. and the men ben *grete* that duellen amonges hem.
 ‘and the men who dwell among them are great’ (XXII. 152/25)
- b. blake hedes, that ben als *grete* as a mannes thigh
 ‘black heads, which are as great as a man’s thigh’ (VVI. 142/22)
- c. and the tothere ne ben not so *grete*.
 ‘and the tother are not so great’ (VII. 37/24)

1. 3. 5. まとめ

MTにおける *gret* の限定用法の場合, 単数形に語尾 *-e* が付加され *grete* となる有標の例の頻度 (8.15%) と, 複数形の *grete* の語尾 *-e* が脱落して *gret* となる有標の例の頻度 (5.56%) は, いずれもかなり低い。このことから, MT の限定用法の場合, 数の区別は, 完全には守られてはいないが, 依然として語尾 *-e* の有無に大きく依存していることが分かる。一方, 叙述用法の場合, *gret* の数の区別は語尾 *-e* の有無によって完全に表されている。単数・複数いずれの例においても, 無標の形式のみ動詞の後位置に生じる。

2. 中英語における不定代名詞の語尾の消失過程

2.1. Many の語尾 *-e*

2.1.1. Many の語彙範疇と用法

今回, 分析対象として不定代名詞の *many* を選んだ理由は二つある。一つは, 一般の形容詞と異なり, 限定用法の他に代名詞用法もあることから, 用法の違いと複数語尾 *-e* の脱落の関係が探れるからである。もう一つは, *many*

自体が「複数」を含意するという特徴を備えていることから、語尾 -e の脱落過程に関して、純然たる形容詞との比較ができるからである。

2.1.2. 限定用法の many と単数形の主要語との関係

中英語の many が単数の主要語を修飾する場合、「配分用法」(distributive use) と呼ばれる古英語以来の ‘many + 単数名詞 (以下, sg)’ という形式の外に, ‘many a + sg’ という形式がある。前者の形式は次第にすたれ, 中英語ではまれとなっていて, 事実, MT で生じるのは (17a-d) の 4 例のみである。いずれも, many が語尾 -e を伴うことはない。

- (17) a. And men fynden *many tyme* harde dyamandes
 ‘And men find many a time hard diamonds’ (XVII. 115/29)
- b. and *many* other *maner* of dyuerse foules
 ‘and many other manner of diverse fowls’ (XXIII. 157/10)
- c. and *many* other *maner* of instruments
 ‘and many other manner of instruments’ (XXV. 169/10)
- d. and *many* *other* of dyuerse schapp ayenst kynde.
 ‘and many other of diverse shape against kind.’ (XXIV. 161/1)

一方, 13世紀に不定冠詞 a/an が成立し, その後に出現した (18) のような新しい配分用法 ‘many a + sg’ は次第に好まれ, 中英語後期には隆盛を極める(藤原 2004:16-19)。しかし, この新しい形式は MT ではきわめて少なく, 7例にすぎない。もっとも, このように配分用法のすべての many が語尾 -e を伴わないことは注目に値する。なぜなら, すでに明らかにしたとおり, 他の形容詞では単数形に語尾 -e が全く付加されないことはありえないからである。もっとも, many は fair, god, gret とは異なり, 2音節語であることから, このことが単数形に語尾 -e が付加されない原因となっている可能性がある。しかし, 後述のように, 複数形には一般に語尾 -e が付加されることから, 音節の数がこの場合の唯一の原因とはいえない。なお, 新しい配分用法が MT ではあまり好まれない理由については, 本稿での検討対象外であるので, 別の機会に考察したい。

- (18) a. how it befelle fulle *many a tyme*,
 ‘how it befell full many a time’ (VIII. /44/30)
- b. among so *many* a dyuerse *folk*
 ‘among so many a diverse folk’ (XXXIV. 228/31)

- c. in *many* a fulle gode honourable companye
 ‘in many a full good honourable company’ (XXXIV. 229/19)

2.2.1. 複数形の主要語を修飾する *many* と語尾 *-e* との関係

現代英語の場合、*many* の「集合用法」は ‘*many*+名詞の複数形（以下、*pl* と略す）’ という形式によって表される。中英語においても、この用法の *many* は他の形容詞と同じく限定的であり、主要語が複数形であることから、*many* は複数形の語尾 *-e* を伴い、*manye* となることが予想される。しかしながら、MT では、該当する300例の大半の231例（77%）において、*many* は（19a, b）のように無語尾であり、（19c, d）のように語尾 *-e* を伴う *manye* は69例（23%）にすぎない。複数形の主要語を修飾する形容詞の場合、語尾 *-e* を伴う例は最低でも94%を上回っていたことから、*many* の場合、*fair* や *gret* とは異なり、語尾 *-e* が付加される確率が激減するのはなぜであろうか。

- (19) a. and it is knowen of *many* nacyouns.
 ‘and it is known by many nations.’ (VIII. 39/17)
- b. And *many* othere londes he holdeth in his hond.
 ‘And he holds many other lands in his hands.’ (VI. 25/6)
- c. in the whiche ben *manye* lampes brennynge,
 ‘in which there are many lamps burning,’ (VIII. 43/11)
- d. and there ben *manye* religious men
 ‘and there are many religious men’ (XVIII. 123/15)

2.2.2. 語尾を伴う *manye* と複数形の主要語との依存関係

不定代名詞 *many* の複数形 *manye* の限定用法が形容詞の複数形と大きく異なる点は、（20a）のように主要語の直前の位置を占める例よりも、（20b, c）のように *manye* と主要語の間に他の語が1～2介在する例の方が多く、全体の66.37%を占めていることである。この直接の原因は、主要語を修飾する形容詞と不定代名詞が占める位置の違い、すなわち、形容詞は常に不定代名詞より主要語に近い位置を占めるという事実にある（Fisher 1992:210-217）。

- (20) a. *manye* chirches ‘many churches’ (IX. 53/3, XII. 76/12), *manye* journeyes ‘many journeys’ (XXVII. 185/27), *manye* wonders ‘many wonders’ (XI. 63/6)
- b. *manye* dyuerse bridides ‘many diverse birds’ (XXXI. 210/12),

- manye other bestes* ‘many other beasts’ (XXXI. 210/3), *manye grete periles* ‘many great perils’ (XI. 72/4)
- c. *manye other Cristene contrees* ‘many other Christian countries’ (XV. 101/28), *manye gode Cristene men* ‘many good Christian men’ (XXVIII. 188/12), *manye fulle strange places* ‘many very strange places’ (XXXIV. 229/17)

2. 2. 3. 無語尾の many と複数形の主要語との依存関係

次に、複数形の主要語を修飾する無語尾の many の特徴を明らかにしたい。このタイプの many の場合、many が主要語の直前の位置に生じる (21a) のような例は133回 (57.57%) 生じるのに対して、間に他の限定詞が1～2語介在する例は98回 (42.43%) となり、複数語尾 -e を伴う manye の場合の66.37% よりもかなり頻度が低くなっている。したがって、複数形の主要語の直前の位置から遠ざかると、many に語尾 -e を付加して「複数」を明記する必要性は無語尾の場合よりもはるかに高まるといえる。

- (21) a. *many clusters* ‘many clusters’ (XXIII. 157/28), *many lyouns* ‘many lions’ (XVIII. 123/9), *many tempests* ‘many tempests’ (XIV. 94/10)
- b. *many faire cytees* ‘many fair cities’ (XIX. 127/3), *many other godes* ‘many other gods’ (XXI. 139/1), *many wylde gees* ‘many wild geese’ (XXIII. 155/8)
- c. *many fulle noble cytees* ‘many very noble cities’ (XXX. 195/2), *many gode holy men* (X. 57/35), *many gret duellynge places* ‘many great dwelling places’ (VI. 28/21)

2. 2. 4. 慣用句における many と語尾 -e

MTにおける many を用いた表現のうち、配分用法の *many tyme* ~ *many a tyme* ‘many a time’ は (22a) に示した4例にすぎないが、(22b) に示した集合用法の *many tymes* ‘many times’ は17回も用いられていて、しかも、主要語が複数形であるにもかかわらず、many が複数の語尾 -e を伴う manye tymes という例は全く用いられていない。この事実は、many tymes が慣用化していることの証拠になりうる。すなわち、manye tymes という句の使用頻度が増すにつれて、この句を構成する二つの語の結びつきが強まると、manye

が語尾 *-e* によって「複数」を明示する必要性が弱まり、「複数」の情報を主要語に依存するという意味での依存関係 (dependence) が強まりつつあったと考えられる。それゆえ、*many* の形容詞用法の複数語尾 *-e* の脱落は、このような慣用的表現における依存関係の変化から促進されたと推測される。

- (22) a. *many tyme* ‘many a time’ (XVII. 115/29), *many a tyme* ‘many a time’ (VII. 36/30, VIII. 44/30, XXIII. 159/8)
 b. *many tymes* ‘many times’ (I. 6/23, II. 9/20, IV. 16/12, VIII. 42/35, XI. 62/9, XII. 73/22, XVIII. 125/25, XX. 135/6, XXI. 139/17, XXV. 140/32, XXIV. 160/19, XXVII. 185/10, XXXI. 205/23, XXXI. 206/8, XXXI. 206/9, XXXII. 212/6, XXXIII. 221/34)

2.2.5. 代名詞用法の *many* と語尾 *-e*

Many が複数形の代名詞として用いられる例は27回生じる。このうち、*many* が無語尾となる (23a, b) のような場合はわずか6例であるが、語尾 *-e* を伴う (23c, d) のような場合は21例ある。絶対数は少ないものの、*many* が単独で「複数」を表す場合には、「形容詞+主要語」という場合のような「数」についての依存関係が存在しないことから、語尾 *-e* が付加される頻度が高くなるといえる。もっとも、それにもかかわらず、*many* が複数語尾 *-e* を伴う例の頻度が20%以上であるということは、*many* 自体が「複数」を含意するという特殊性によるものと思われる。

- (23) a. For there are *many* of hem broken and fallen
 ‘For, many of them are broken and fallen there’ (II. 9/26)
 b. where there ben *many* of dyuerse folk,
 ‘where many of diverse folk are there’ (XXI. 138/10)
 c. In that contree dwellen *manye* of the Iewes
 ‘In that country many of the Jews dwell’ (XII. 79/20)
 d. and of lemmannes als *manye* as he may susteyne.
 ‘and as many of lovers as he may sustain’ (XV. 99/12)

2.2.6. まとめ

MT の限定用法の *many* は、一般の形容詞の限定用法とは正反対に、複数形に語尾 *-e* が付加されない例の方が圧倒的に多く、全体の77%を占める。ところが、代名詞用法ではこの比率は逆転し、語尾 *-e* を伴う例は全体の77.78%を

占める。この事実に対しては、many は他の形容詞とは異なり、それ自身が「複数」を含意することから、とりわけ限定用法の場合には、複数語尾 -e をことさらに明示する必要性が薄れ、一般の形容詞の場合よりも早く語尾 -e の脱落が始まったという説明は説得力がある。一方、代名詞用法の場合、複数性の形式上の提示は many 以外にはなしえないことから、many が語尾を伴う確率が高くなるものと思われる。Many tymes のような慣用表現では、二つの語の結束性が強いことから、主要語の tymes に対する「複数」の情報の依存度が高くなり、語尾の脱落はいつそう促進されたと考えられる。なお、MT では many が叙述的に用いられる例や主要語の後位置に生じる例は皆無に近いことから、分析対象とはならなかったことを付け加えておく。

3. 全体のまとめ

本稿では、MT における形容詞 fair, god, gret と不定代名詞 many に対する語尾 -e の付加および脱落がどのような原則に基づいているかについて分析した。(24)はその結果をまとめたものである。MT における語尾 -e の付加は、一見かなり恣意的なように思われるが、著者はかなり明確な原則に従っていることが分かる。すなわち、形容詞 fair, god, gret の複数形は、限定的・叙述的の区別を問わず、全体として100%近い高い確率で語尾 -e が伴う。したがって、この文献では、主要語のみならず、それを限定する形容詞についても「複数」を明示する必要性は依然として強く感じられていたことになる。一方、単数形の形容詞の場合、語尾 -e の付加の動機は語によって大きく異なり、god 'good' は100%近い確率で -e を伴う。この特異な現象は、著者が god に語尾 -e を付加することによって、あるいは、語幹の母音 o を重複させることによって、「神」を表す God または god と区別しようとした結果であると考えられる。一方、fair の単数形の3分の1以上が語尾 -e を伴うのに対して、gret の単数形のほとんど(全体の約95%)が無語尾となる点については、個別の原因が想定されるが、詳細は今後の検討課題である。一方、不定代名詞の many が複数形の主要語を限定する場合、無語尾の例は77%を占める。一般の形容詞と大きく異なるこの際立った特徴は、many が「複数」を含意することから、形式上の「複数」の必要性が減少し、語尾が早く脱落し始めた結果の反映であるといえる。Many tymes のように慣用性が高まり、二つの語の結束性が強まった表現の場合には、many の複数語尾 -e の脱落は急速に進んだと思われる。

その反面, many と主要語との間に語が介在し, 両者の距離が大きくなると, many に語尾 -e が付加される例が多くなっていることから, 両者の間の「複数性」の依存関係はそれほど弱まらず, 主要語はもとより, many にも「複数」を明示する必要性が維持されていると考えられる。

(24)

		単 数		複 数		備 考
		無語尾	語尾 -e	無語尾	語尾 -e	
fair	限定用法	56 (62.99%)	33 (37.01%)	0 (0.00%)	36 (100.00%)	
	叙述用法	6 (100.00%)	0 (0.00%)	0 (0.00%)	2 (100.00%)	
god	限定用法	4 (3.17%)	122 (96.83%)	0 (0.00%)	49 (100.00%)	
	叙述用法	4 (30.77%)	9 (69.23%)	0 (0.00%)	5 (100.00%)	
gret	限定用法	327 (91.85%)	29 (8.15%)	8 (5.63%)	136 (94.44%)	
	叙述用法	25 (100.00%)	0 (0.00%)	0 (0.00%)	9 (100.00%)	
many	限定用法	11 (100.00%)	0 (0.00%)	231 (77.00%)	69 (23.00%)	many+sg ⁽⁴⁾
	代名詞用法			6 (22.22%)	21 (77.78%)	manya+sg ⁽⁷⁾

形容詞の場合, (25) に示したとおり, 主要語の後位置に生じるのは単数・複数との区別なく, 無標の形式に限られる。ただし, この場合, god の単数形は語尾 -e が付加された gode という形式が無標であるとみなす必要がある。

(25)

		語尾の有無	倒置の有無	備 考
fair	単 数	-φ (無標)	15/56	
		-e (有標)	-	
	複 数	-e (無標)	6/36	
		-φ (有標)	-	
god	単 数	-φ (有標)	-	MT の著者に特有
		-e (無標)	12/120	MT の著者に特有
	複 数	-e (無標)	3/49	
		-φ (有標)	-	
gret	単 数	-φ (無標)	18/327	
		-e (有標)	-	
	複 数	-e (無標)	24/136	
		-φ (有標)	1	純然たる倒置ではない

参考文献

- Bradley, Henry (1904) *The Making of English*, Macmillan, Boston.
- Fisher, Olga (1992) "Syntax", *The Cambridge History of the English Language II*, ed. by Norman Blake, 207-408, Cambridge University Press, Cambridge.
- Fujiwara, Yasuaki (藤原保明)(2004)「集合数詞 many の史的発達」『近代英語研究』第20号。
- Kerkhof, J. (1966) *Studies in the Language of Geoffrey Chaucer*, Leiden University Press, Leiden.
- Mustanoja, Tauno F. (1960) *A Middle English Syntax*, Société Néophilologique, Helsinki.
- Pollard, A. W. (ed.) (1900) *The Travels of Sir John Mandeville*, Macmillan, London.
- Seymour, M. C. (ed.) (1967) *Mandeville's Travels*, Clarendon Press, Oxford.
- Traugott, Elizabeth Closs (1972) *A History of English Syntax*, Holt, Rinehart and Winston, New York,
- Van der Meer, Hindrikus Johannes (1929) *Main Facts Concerning the Syntax of Mandeville's Travels*, Kemink En Zoon, Utrecht.

[本稿は平成19年度科学研究費補助金（基盤研究（C）「英語の不定代名詞の通時的的研究」（研究代表者：藤原保明，課題番号：17526317）の交付を受けて行なわれた研究成果の一部である。]